

稲・大豆作情報 (NO. 6)

1. 水稲作況情報田の生育概況(8月5日現在)

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 cm	茎 数 本/m ²	主稈 出葉数	葉色 SPAD	
夢しずく 佐賀市本庄町	6/17 18.0株/m ²	本 年 平 年 平年比	81.9 87.7 (93)	361 375 (96)	12.8 12.6 (+0.2)	39.5 39.5 (±0)	今週も高温多照少雨で推移した。 草丈は「夢しずく」は平年より低いが、その他は平年並み。茎数は「ヒヨクモチ」で多くなっている。葉齢は「夢しずく」「ヒヨクモチ」で平年よりやや多く推移している。 葉色は「さがびより」が平年よりやや淡い。
さがびより 小城市芦刈町	6/21 18.5株/m ²	本 年 平 年 平年比	75.3 75.4 (100)	458 469 (98)	12.5 12.8 (-0.3)	37.9 38.4 (-0.5)	
ヒヨクモチ 小城市牛津町	6/29 19.3株/m ²	本 年 平 年 平年比	58.3 58.2 (100)	705 635 (111)	13.0 12.7 (+0.3)	42.1 41.7 (+0.4)	

注1) 各品種 前作：麦

注2) 施肥及び病害虫防除は地区基準に準ずる。

〈参考〉佐賀県農業試験研究センター 米づくり情報(抜粋)(8月6日調査)

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 cm	茎 数 本/m ²	主稈 出葉数	葉色 SPAD	
夢しずく	6/18 19.6株/m ²	本 年 平 年 平年比	84.1 82.5 (102)	375 415 (90)	12.6 12.7 (-0.1)	41.1 39.0 (+2.1)	【草丈】「夢しずく」はやや高く、「ヒノヒカリ」、「さがびより」は平年並み。「ヒヨクモチ」はやや低い。 【茎数】「夢しずく」は少ない。その他の品種は多い。 【葉齢】「夢しずく」、「ヒヨクモチ」は平年並み。「ヒノヒカリ」は進んでいる。「さがびより」は遅れている。 【葉色】「夢しずく」は濃く、「ヒノヒカリ」「ヒヨクモチ」は淡い。「さがびより」は平年並み。
ヒノヒカリ	6/18 22.2株/m ²	本 年 平 年 平年比	76.1 75.8 (100)	534 499 (107)	12.7 12.5 (+0.2)	36.2 37.4 (-1.2)	
さがびより	6/21 16.7株/m ²	本 年 平 年 平年比	72.3 73.3 (99)	560 521 (107)	12.2 12.8 (-0.6)	38.4 38.2 (+0.2)	
ヒヨクモチ	6/21 22.2株/m ²	本 年 平 年 平年比	66.4 67.5 (98)	851 739 (115)	13.1 13.1 (0)	37.7 38.4 (-0.7)	

2. 水稲管理

高温・好天で生育は平年より進んでいる。生育ステージに応じ、水管理・穂肥・病害虫防除を適正に行う。

○水管理

- ・「ヒヨクモチ」以外は幼穂形成始期～幼穂形成期・穂孕み期に達しているため、強い水分ストレスを与えないよう間断灌水を励行し、湿润（黒乾）状態を保つ。
- ・中干し圃場で、高温と乾燥により白乾状態となっている圃場は、そのまま一気に水を溜めると根の活力が低下し、下葉枯れを助長するため、まず走り水を行い、その後は間断灌水とする。

※台風接近時には、風により稲体の動揺や蒸散量増加が想定されるため、深水管理とする。台風通過後は茎葉の損傷により根の老化が進むことがあるため、新しい水と入れ換え、その後もこまめな間断灌水とし、根の機能維持に努める。

○穂肥 ～ 散布時は入水し、湛水状態で施用 ～

夢しずく

- ・8/5 現在、止葉抽出中で、幼穂長が 30～60mm となっている（情報田）。出穂はお盆頃の見込み。
- ・穂ばらみ期～出穂期頃は要水量が最も多くなるため、灌水の期間をやや長めとした間断灌水を心がける。

ヒノヒカリ

- ・現在、幼穂長 5～7mm で、穂肥施用時期となっている。

幼穂形成始期の草丈	葉色		施用時期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
80cm以下	3.0以下	34以下	20～24日	1～2mm	3.0	18.8
	3.0～3.3	35～38	18～20日	3～5mm	3.0	18.8
	3.5～3.8	39～40	16～18日	5～15mm	2.0	12.5
	3.8以上	41以上	—	15～30mm	1.0以下	6.3以下
80cm以上	3.0～3.3	35～38	18～20日	3～5mm	2.0	12.5
	3.5～3.8	39～40	16～18日	5～15mm	1.5	9.4
	3.8以上	41以上	—	15～30mm	1.0以下	6.3以下

さがびより

- ・現在、幼穂 1mm 程度。穂肥施用時期は、8月中旬（お盆頃）になると思われる。
- ・穂肥の施用時期は幼穂長 5～10mm が基準。

さがびよりの生育ステージと穂肥の施用時期のイメージ

「さがびより」の生育ステージ	←--- 穂肥時期の目安 ---→											
	出穂前日数	-25	-24	-23	-22	-21	-20	-19	-18	-17	-16	-15
幼穂形成始期及び幼穂形成始期からの日数		★	★				4日後		6日後	1週間		
幼穂長			1mm		2mm	5mm	10mm		15mm	20mm		
標準的な草丈 (cm)		72～75				※ 草丈の指標は、1cm/2日減じて使用する						
備考						適期						

注1) 「★」印は、幼穂形成始期を示す

★新基準 H29～★ さがびより診断基準

幼穂形成始期 (幼穂長1mm) の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 (kg/10a)	BB602 (kg/10a)
80cm以下	3.5以下	38以下	18～20日	5mm	2.5	15.6
	3.7	38～40	18日	10mm	2.0	12.5
	3.8	40～41	16日	15mm	1.0	6.3
	3.8以上	42以上	施 用 し ない			
80cm以上	3.8以下	39以下	16～18日	10～15mm	1.5	9.4
	3.8以上	40以上	施 用 し ない			

さがびより旧診断基準 (※中山間地域参考)

幼穂形成始期 (幼穂長1mm) の草丈	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量	
	群落	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 (kg/10a)	BB602 (kg/10a)
75cm以下	2.5以下	33以下	18～20日	5mm	2.5	15.6
	3.0	33～37	18日	10mm	2.0	12.5
	3.5	37～38	16日	15mm	1.0	6.3
	3.8以上	39以上	施 用 し ない			
75～80cm	3.0以下	36以下	16～18日	10～15mm	1.5	9.4
	3.0以上	37以上	施 用 し ない			
80cm以上	施 用 し ない					

ヒヨクモチ

- ・現在、最高分けつ期を迎えている。
- ・間断灌水に移行し、幼穂形成期までに軽めの中干し（小さなヒビが入る程度）を行う。

○病害虫情報(発生および防除)

- ・今年のトビイロウンカは、3 飛来（5月11日、7月4日、7月9日）が確認されており、飛来量は平年並みで、飛来の中では7月9日がやや多い。
- ・農業技術防除センターより作成された最新発生予測図は下図のとおり（7/14 発信情報に変更なし）。
なおこの発生予測図は気象をもとに随時更新され、変更される場合があるため、図の下に示すホームページで最新情報を定期的に確認し、防除の参考にする。
- ・8月4日巡回調査において確認されたトビイロウンカ幼虫は、0.15～0.25 頭/株であった（さがびより）。ただ移植時期や肥培管理によっては、トビイロウンカがより多く発生している可能性がある。また高温少雨の傾向が継続しており、急増する場合もある。今後も引き続き、それぞれで発生状況を確認し、適期適正防除に努める。

防除効果が高い時期は、幼虫ふ化揃い期（各幼虫期の前半（図中 ★））である。



農業技術防除センターHP 参照：病害虫情報 <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

防除薬剤

薬 剤	希釈倍数	使用液量	使用時期	使用回数
エクシード™フロアブル	2000倍	60~150L/10a	収穫7日前まで	3回以内
トレボン乳剤	1000~2000倍	60~150L/10a	収穫14日前まで	3回以内
エミリアフロアブル	1000倍	60~150L/10a	収穫7日前まで	2回以内
スタークル液剤10	1000倍	60~150L/10a	収穫7日前まで	3回以内

◆紋枯病

- 今年のように生育が良好で、過繁茂状態の圃場では、一気に進展する恐れがあるため、田回りを励行し、病斑が確認された場合は、病斑が上位葉の葉鞘に進展する時期（液剤、粉剤の場合は出穂 10~20 日前が目安）に防除を行う。



3. 大豆管理 ～ 生育に応じ適正管理を ～

降雨の違いで地域により様々な生育となっている。
引き続き、気象予報を注視し、適正管理を行う。

○生育状況

6月下旬～7月初旬播種	本葉4～7葉
7月上中旬播種	本葉1～3葉
7月中旬以降	初生葉～本葉1葉

○培土

- ・出芽した大豆は、以下の目安を参考に培土を実施する。

○実施時期の目安

1回目：本葉2～3枚の頃、子葉が隠れる程度におこなう。

2回目：本葉4～5枚時に、初生葉（子葉の上の葉）まで隠れるようにおこなう。

※2回目実施後は降雨対策に表面排水を促すため、排水口まで畝溝をつなげる。

培土の効果

- ★不定根の発生促進
- ★土壌への酸素供給
- ★倒伏対策の強化
- ★雑草対策 など

○雑草対策

- ・**イネ科雑草**が多いところでは、ポルトフロアブル、ナブ乳剤等で防除する。
- ・**カヤツリグサ科**が多い場合は、大豆バサグラン等で防除する。
- ・**アサガオ類やホオズキ**は、繁殖力が強く、放置すると次年度以降の発生量が多くなるため、圃場内はもとよりまくら地や畦で発生している場合は、必ず抜き取り圃場外へ持ち出すか薬剤散布での防除を徹底する。

○病害虫対策

- ・ハスモンヨトウは“平年よりやや少ない”発生となっているが、一部の地域でハスモンヨトウ食害による白変葉の他に新葉または本葉の一部に食害（写真）を受けている圃場が散見される。葉に大きな穴が開いた株が目立ち周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高く、稀にシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。

防除は、オオタバコガが主流であれば**プレバソン**、**ペガサス**、シロイチモジヨトウの場合は**プレオ**が効果的。

ノーモルト、トレボンは感受性が低いため、使用を避ける。

また防除にあたっては周辺作物へのドリフトに注意し実施する。

※台風通過後は、葉の損傷により葉焼病などの病気の発生が想定される。田廻りを励行し、発生を確認したら適切に防除を行う。また台風の進路、雨量によっては、有明海沿岸は潮風による塩害の恐れがあるため、降雨量が少ない場合は散水により塩分除去も想定しておく。



1回目の培土時期の目安



